

2010年度 政治外交史Ⅰ 期末試験講評



今回の問題文は下記の通りでした。

1895年から1918年の日露関係について説明しなさい。

1. 答案の作成方法について

最初に、どのような手順で答案を作成すべきだったか、私が補講で教授した手順に即して、見てゆきます。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

今回の問題文はきわめて短く、しかも誤解の余地はほとんどないかと思います。ただ、あえていうならば、最後の「説明しなさい」の部分だけは、少し注意が必要かもしれません。なぜなら大学教員の中には、「論じなさい」と指示した場合は、自分の意見を積極的に盛り込み、さまざまな「立論・議論」を行わなければならない、他方で「説明しなさい」と指示した場合は、そういった「立論・議論」は回避し、客観的・中立的に事実関係だけを述べなければならない、と厳格に区別する者もいるからです。

しかし私は、その点についてはあまり厳しく区別しませんので、かりに答案の中に、さまざまな「自分の意見」が書かれていたとしても、とくに減点はしませんでした。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

I. 今回の問題は「1895年から1918年の」「日露関係」について問うています。したがってまず、

- a. 1895年から1905年：日清戦争（1894～95）直後から、義和団事件（1900）をへて、日露戦争（1904～1905）が終るまで
- b. 1905年から1917年：日露戦争（1904～1905）からロシア革命（1917）まで
- c. 1917年以降：ロシア革命（1917）からシベリア出兵（1918）まで

と時期を区分し、それぞれの時期について、言及すべき論点を、紙に書き出さなければなりません。

具体的には、上記に挙げたもののほか、義和団事件の際にロシア軍が満洲を占領したこと、日英同盟によるロシアへの対抗措置、b.の期間における4次にわたる日露協約などです。これにくわえて、露仏独による三国干渉などに触れられれば、さらに高得点となります。

II. 当然ながら、上記のa.～c.のいずれかの時期に関する説明が欠けている場合は、大幅な減点となります。たとえば、日露戦争の終結（ポーツマス条約）までで答案が終っている場合、問題が指定する期間（23年間）のうち、10年分しか説明していないわけですから、高くてもせいぜい50点しかつけられません。

III. 講義のレジュメに照らしていうと、だいたい32ページ、36ページから38ページ、40ページ、そして55ページの内容をまとめれば、それで十分ということになります。参考までに、答案に含まれていることが望ましい論点を、次ページ〔表1〕に書き出してみます。なお、あくまでも参考例ですので、これ以外の論点が含まれても構いません。

IV. なお、答案用紙の裏や端の方に、メモが残っていた答案については、一応チェックをしました。このメモが良くできているものについては、とくに裁量点を附加した例もあります。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

この点については、きちんと段落わけができているか、全体としてまとまりのある構成となっているか、といった面からチェックしました。思い付くままにダラダラと書き並べたような答案は、当然ながら減点しています。

〔表1〕 論点リスト (参考)

- a. 1895年から1905年：満洲や韓国をめぐって敵対的な関係
 - ①日清戦争（1894～95）直後の三国干渉→日本国内に反露感情が高まる
 - ②朝鮮に対する優越的地位をめぐる日露の対立
 - ③義和団事件（1900）以後のロシア軍の満洲占領と日英同盟（1902）による対抗措置
 - ④日露戦争（1904～1905）による満洲・韓国における「勢力範囲」の確定
- b. 1905年から1917年：友好的な関係の成立と強化
 - ①第一次日露協約（1907）による日露両国の勢力圏の設定
 - ②第二次日露協約（1910）による第三国（米国）の進出に対する共同行動の約束
 - ③第三次日露協約（1912）による内モンゴルにおける勢力範囲の確定
 - ④第四次日露協約（1916）による軍事面での攻守同盟の確立
- c. 1917年以降：友好関係の崩壊と軍事的対立の再現
 - ①ロシア革命（1917）による協商関係の崩壊
 - ②シベリア出兵（1918）による軍事的対立の再現
- d. まとめ

④実際に答案を書く。

(省略)

⑤きちんと読み直し、おかしい所がないかチェックする。

- I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずなのですが、誤字を理由に、減点した答案も少くありませんでした。もったいない話です。
- II. また、日本語として意味が通っていない答案も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。

あくまで推測ですが、2回の補講にきちんと出席し（あるいは自分で録音などをチェックし）、まじめに努力した学生は、それなりの答案が書けていたようです。しかし、これらの努力を怠った（あるいは努力の形跡がまったく見られない）学生については、点数のつけようがない、悲惨な答案が数多く見られました。

そもそも、事前に「外交関係で、二国関係に焦点をあてた問題を出題する」と予告していたわけですから、日露関係が出題されることは十分に予想できたわけで、きちんと準備していたかどうかで、点数の面でも明暗がはっきりと分れたように思われます。

2. 期末試験の採点について

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。

→まず、設問をまったく無視して「1920年代の日米関係」について解答した答案が、複数見つかりました。これは当然、設問に対する解答になっていませんから、0点しかつけることができません。

また上述した通り、日露戦争の終結（ポーツマス条約）までで終わっている答案も、数え切れないほどありました。これも題意を満たしているとはいえませんので、大きく減点しています。具体的には、上記の論点表でいうと、a.の時期しか取り上げていないわけですから、50点満点で採点しました。

II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。

→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案は、大きく減点しました。また、段落わけがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、もう一度補講の内容を思いだし、「答案構成（設計図）」をきちんとしてから、答案を書き始めるようにして下さい。

III. 分量のバランスがとれているか。

→たとえばa.の時期について長々と書いたあと、b.とc.の時期についてはそれぞれ1行で終り、

というわけではありません。つまりそれぞれの論点の分量が、バランスよく配分されていない答案についても、減点の対象となります。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

I. 必要な論点が揃っているか。

本来なら、1895年から1918年のすべての期間を網羅していない答案は、それだけで0点答案なわけですが、実際には「大幅減点」に留めています。また前ページに参考として掲げた論点のうち、どれくらいが答案に含まれているか、といった点にも留意して、採点作業をすすめました。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分あるわけですから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下ります。「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなるだけです。全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。

ちなみに書き終わっていない「未完結の答案」も、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

III. 「基本的なミス」を犯していないか。

日露戦争で勝ったのはロシアであるとか、日英同盟は結ばれていないとか、基本的な事実の誤認があった場合、少し大きめの減点をしました。なぜなら、それらのミスは「講義をきちんと聞いていなかった」と白状しているのに他ならず、また社会科学を専攻する大学生として、あまりに恥しい誤りだからです。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、あまりに酷いものについては減点しました。

こう書くと必ず、「読めればいいのではないですか」といいます学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。

またもうひとつ、今年の採点で気になったのですが、「レジュメ形式」や「箇条書きの答案」が、複数枚ありました。大学の試験で「論述式」の場合、基本的にレジュメ形式や箇条書きは認められません（一文ごとに必ず段落変え＝改行しているものも含む）。これらは形式違反の答案として、大きく減点しています。そのような答案を書いた記憶のある人は、高校時代の「小論文」を想起して、あのような「論理的な段落わけと、内容的な起承転結のある」文章を書くようにしてください。

④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでA評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にAがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、質問票を教務課に提出してもらえば、随時対応します。ただし成績の変更（確認）を要求するのであれば、かならず正式な「成績確認制度」の方を利用して下さい（直接連絡をもらっても、制度的に対応することができません）。

3. 成績分布について

①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布

A：15.1% B：8.0% C：18.6% X：40.7% 無資格・欠席：17.6%

②期末試験受験者における成績分布

A：18.3% B：9.7% C：22.6% X：49.4%

〔解答例〕

1 三国干渉からポーツマス条約まで（1895年から1905年）

日清戦争は1895年に終結したが、ロシアはその直後にフランス・ドイツと手を組んで日本に圧力をかけ、遼東半島を清国に返還させた。これを契機として日本国内に反露感情が高まることとなる。またロシアは、清国が撤退した後の朝鮮半島に進出し、自国の影響力を拡大するような動きも見せはじめた。そのため日本側には、ロシアに対する警戒心がいつそう高まることとなった。

日露の対立がさらに激しくなったのは、1900年の義和団事件の後のことである。事件に際してロシアは、満洲地域に軍隊を進め、事件後も同地の占領を続けた。そのため日本側は、満洲が事実上のロシア領になるのではないかと、さらに朝鮮半島まで勢力を伸ばしてくるのではないかと恐れるようになった。このようなロシアの動きに対抗するため、日本政府内では、桂首相や小村寿太郎外相のようにイギリスと手を組んで対抗すべきとする勢力と、伊藤博文や井上馨のようなロシアと交渉することで、これ以上のロシアの南下を阻止すべきと考える勢力が対立する。しかし結局前者が優勢となり、1902年に日英同盟が結ばれることになった。

この日英同盟を背景として、日本はロシアと満洲・韓国問題をめぐって交渉したが妥結に至らなかったため、1904年から日露戦争が戦われることになる。この戦争は日本の勝利に終り、アメリカの仲介によってポーツマス条約が締結されることとなった。

2 ポーツマス条約からロシア革命まで（1905年から1917年まで）

ポーツマス条約の締結を契機として、日露関係は一転して友好的になってゆく。そのきっかけは1907年の第一次日露協約で、これにより日露両国は、北満洲とモンゴルをロシアの、また南満洲と朝鮮半島を日本の勢力圏とすることになった。また日露戦争後、アメリカが満洲に進出する動きを見せるようになったため、1910年の第二次日露協約によって日露両国は、第三国（アメリカを想定）の進出に対して共同行動をとる約束を交した。

さらに内モンゴルにおける勢力圏を設定した第三次日露協約をへて、日露は第一次世界大戦中の1916年、第四次日露協約を結ぶことになる。これにより日露両国は、ついに軍事面での攻守同盟にまで、関係を強化することとなった。すなわちこの時期の日本は、日英同盟と日露協約という、二つの友好国との関係を外交の基軸とすることになるのである。

3 ロシア革命とシベリア出兵

ところが1917年に、ロシアで革命が勃発し、ソビエト政権が成立することで、日露協約は無効となり、従来の日露関係は根本から覆されることとなった。その後、日本国内では、ソビエト政権に対抗してシベリアに出兵すべきとの意見が強まり、1918年にシベリア出兵を宣言するに至る。これにより、日露（ソ）はふたたび軍事的に対立することになった。

4 まとめ

以上をまとめると、1895年から1918年の日露関係は、1905年までの「満洲や韓国をめぐって敵対する時期」と、1905年から1917年までの「友好的な関係が成立・強化された時期」、そして1917年以降の「友好関係が崩壊し軍事的対立が再現した時期」に三分することができるだろう。

以上

※これはあくまでも「解答例」であり、この通りに書かねばならないわけではない。